

粉になった女



島さち子

粉になつた女

装
画

島
さ
ち
子

粉になった女

川の水がいきなり、静かに、ゆがみの多いオバケ鏡になって揺れはじめる。あたりの景色の全部が、畸形した曲線をゆるゆる描き、しだいしだいに大きく、すべての色が、かすれもしないで濃さを増す。ふたりは眩暈の中心になれない、眩暈の外にも出られない。地震だ、地球が小刻みに出没している、足もとがふっとなくなり、無重力、宙ぶらりんのふたりのごく短い時間、ふたりは立ち泳ぎしており、横たわっており、倒れかかっており、逆立ちしており、どちらが上でもよく、どちらが下でもよく、さっと忘れた、かすかな途切れになってしまう。

そこにぶらさがっている木の根が多少は長くなっている。男は釣り場を探し、女はカヤを折り、大胆なかたちで腰をおろす。白い泡の塊がいくつか川を来る。氷山のように浮かび、水面そっく

りそのままの影を映し、ポツポツの小さい泡を撒いて、シュウシュウ突っ走る。

無数の泡が排水口から川を逆上ってきたか、斜めに走り、川下を占領し尽くし、入道雲となり、しばらく一部分をしぼませ、一部分を増殖させ、変形し、ゴムのようにふるふるし、一つの新しい生命を得て、一抱えもある大きな塊になって、女の足もとに転がり、砕けもせず飛び上がる。

ときに首飾りのように連なった泡が、女の大きな開けっ放しの膚に降りかかる。泡は何百となく割れ、色をすり替え、崖の上の街の全景を映し、泡同士がこすれ合い、パチパチするあたりで女の皮膚が関節のように寄り集まり、ついにはひび割れる。

泡が落ちてくるのは、空が落ちること。顔に空が張りついて、もう世界が終わりになる、空じやない、街だ、街が崖から落ちてくる、わたしばかりに落ちてくる。

男の方に女は逃げるが、瞼がむかつき、目玉が転がり出、虹色に覆われた髪の上を震動が過ぎ、泡は重く流れ落ちて、女の背の大きく開いた襟元がぶつぶつ煮立ち、それを振り落とせず、自分の背から逃げ、顔を手でおおう。

女の外で泡がふくれる、女は無言の自転をする。

女の体中に細かい発疹ができ、やがて乾いて粉まみれになり、白い粉はときに何枚か着ている服を通して外側に浮き出す。

「体というものは、さらさらしているものなのね。ほんとに体らしい体は、ぐにやぐにやした血なまぐさい器官をもたない、無色無臭の綺麗な細かい粉末からなっていたのね。わたしから体を吐き出してしまおうという思いが、すうっと消えてしまったわ」

ほんとうは少し激しくなったというだけで、日常こんな細片をこぼしつづけていたのだ。しじゅう体をこぼし、風に吹き飛ばし気づかずになっていた。

それはほんとうは女だけでなく、誰もが、地面にこぼした体の粉を、そそそ、そ、と吹き流して、窪みに吹き溜めるというふうには……、ときに舞い上がりもしているらしい。それはごく自然な現象にすぎない。しかし女は、立ちのぼらせている体の粉を、まるでいまわしいおぼけのように避けて、二、三メートルほど動くが、粉は女の体を拡大したかたちで立ちのぼったまま、それを崩そうとしない。

女のさわる土は地熱で温もっており、手のひらの下で丸い丘をつくって震えつづけ、震える地表は女の手、女の手は大陸になり、地上はどこも雑然としたでこぼこによって占領される。

人間に着古されて崩れたでこぼこというより、ずっと昔から人と無縁に、土自体の年月のきざみで古びたという崩れだ。地平線も水平線もふわふわ、山の稜線もふるふる。

吹き散らされ、吹き寄せられ、どこにも行きよのないゴミが華やかだ。

人声が女の髪に小さな蝶を結び、リボンになって離れない。たくさんの結び目に毛根が引かれて痛い、いたるところ、小指の先、双方の耳、マツ毛、街路樹のヤナギの葉先、人々の声が蝶結びになる。頭上につむじを二つずつ持つ幼い姉妹が、手をしっかり握り合って立っている。

「地震はね、千倍も百万倍も大きいブルドーザーがくるのよ、今見張っているところなの」

これから配達に出かけるために用意されている、三台の自転車の青箱は、黒いヒモでⅣⅨⅢに荷台にくくられ、地熱のにじんだ重い震動をしている。すべて微熱にゆらぎ看板さえ白い。

女は駅に通じるショッピングセンターのドアを引く、開いたドアから女が入るより先に、奇妙に縮んだ腕で胸を蔽った少女が飛び出し、女が体を横に寄せる隙に、老人の綿毛みたいな眉が小走りを通り、つぎに男の子のひよわな後頭部から首が、つぎに淡い色のスカートをつまんで老女のしぼんだ足が……。彼らの体の一部にしか女が目を置く暇もないほど素早く通過する。彼らの誰かにドアを開いている役目を託したいが、途切れなく出てきて、女は彼らに逆らって中に入っていく隙間を見い出せない。

「今ころ、ママは話しているわ、きつと。娘は、首に新しいスカーフを巻いて出かけましたの。ニンニクの臭いはおちたかしら、などと気にはしていましたが、とにかく、外出する気になってくれただけでも、前進ですもの……、などと。彼と川に釣りに行った日の晩からかゆくなって、そしてずーとひどかったんです」

たった一週間ばかり外出しなかったということ、わたしはこうも要領悪く優しくなり、他人

に気をつかうようになっていっているのね。みんな地震だから避難して外に飛び出して来るといふのに。女はなじみのない人々に近づき、みんなの内緒話のこっそりとした口つきが普通の口に戻るのを見極める。女の赤くなつた枝毛があたりの白い光を八つ裂きにし、知り合いでもない中年女の薄汚れたソックスの足が、女の曲げた足の上に乗って来る。横揺れが来て、両側から女はけずりとられ少し痩せる。震えて見えるのはみんな聞こえる、みんな歩調を合わせた共鳴現象なのだ。もはや女はどこにいるのかわからない。上膊部はそよ風が吹き、みんな一方にたなびく粉なのに、手のひらを開けば、山盛りになつた淡い湯気だ。こんなとき女は少し死に少し生きて、膚は搔きならされた斜面になる。日に数十回の余震で、滑り落ちる粉は土の流れだ。滑らかに吹き流れていく。

震動の一区切りがこないうちに動き始めると、足の先が金網にぶつかつてしまい、ポリリンと音がする、突発的に女の体のしんでサイレンが鳴る、まわりは意外にのんびりした音でみちいて、そのためにおきるざわめきはない。むやみに物を搔きこんで、ネズミの巣籠もりのように家のなかにいる人物が、物のかたまりをほどいている。いまがらりと地下と地上で模様替えをしたとしても、地球のために何ひとつ悲しむことなどないのだけれど……。

「しばらく前から土は変わってきていたから、土のなかの生きものたちはさほど驚かないでしょう。小さなカメの群れが地下水と一緒に地からはき出され、どこまでもどこまでも、ぬれた尾を引きずって線を描いていくのを、ずっと前に見ましたもの。わたしの蒔いたヒマワリの種は三カ

月たっても芽がでないの、植えたパンジーの苗は全く根がつかなくて、まるで、土にとけた消え方をしたわ。これっぽっちのことで現代と昔の間に一線をひくことが出来るというの？」

「世界中にいちどきに脱線事故がおきているのかもしれない、地球がずっこけたのですから」

「テレビのなかでは凧がみんな一本の太い足を泳がせて、シュウシュウなりながら猛烈に生きて見えましたわ」

女の手のなかのトマトを背景にして大地がぐらぐらする。

「地球の中心とはこんなもの、赤いトマト一個だったのね。私がこの時代の遺物として埋蔵されるなんて光栄すぎますわ」

「でもあんたの家は、少しも傾いておりませんわ、此処から見ると背が高くなって、お城のようですね」

運転手が車から出て街灯のそばにいる。ややたるんだ顔は脂じみて、空中の細かい土を付着させながら、付着させるのが目的であるかのように立っている。

そうしていたら、やがて白か黒の山になるだろう。運転手の足の間に、木立にすがりつくように、少女が立ち、顔をこちらに出して小動物の警戒を怠らない黒い丸い目を女に向ける。そして、なにか嗅ぎつけたというような身の竦めかたをする。

「あんたは細くなりましたね、三年前、保育園のころそっくりに見えますよ。あの頃のことを覚えていらっしやるでしょう。あなたは、この子に、パパお忙しいの、って聞いて、ボタンがとれ

たらパパにそういうのよ、っていったんですよ。パパはボタンをつけてくれない、とこの子が言ううと、あんたはこの子の服にボタンをつけてくれた、二個もですよ。あんたの服のボタンをとってつけてくれたんです。ティッシュも持たせてくれたし、靴もふいて、名前を書いて下さった。覚えていないことはないでしょう。あなたはわたしを好いていたから、この子に親切だった。そのことはよくわかっていました、だからわたしはこの子の世話をわざとしてやらないで、あんたがこの子にどこまで親切にしてくれるか、見守っていたんです、この子もあんたになついていたことだし、結婚してもよいと思いましたよ。あんたのお母さんに何回も申し込みましたが、あんたのお母さんは名誉毀損だとはねつけました。気丈の方というか、お前の子供があんまり汚くて、うじが湧くから、どうしても放っておけなくて面倒をみたんだよ、ってそう申されました。あなたのお母さんは、あんたにそのことを話されませんでしたか。わたしは郷里に土地を三十ヘクタールも持っております。地震で消えるような、情けないものじゃない……地震が終わったようですね、交通規制もなさそうだ。車に乗ってくださいますか。郷里に帰って暮らすつもりなんです」

地震は偽文書を葬るためにあるのに……ウソがほどけるためにあるのに……、新しいウソを作り出したりする。

「時がときですよ。郷里は道が天を指して昇っていくかと思うほどの広さです。あんたは病気で痩せているらしい、震動のない広い場所が必要なんでしょう。こんな世じゃ、結婚の条件としては最高だと思えますよ。この子はすっかり悪くなって、育たなくなりました。三年前と同じに小

さい。妹にツバをかける、頭を踏む、この子が怖いといって二度目の妻がこの妹を連れて逃げましたよ。あんたしか、この子の世話は見切れないと思います」

女は目を見張り、自分の口をわしづかみにして叫び声を蔽う、足の裏を叩く振動で体中が、幾歳月をむぎむぎ消費するような身震いをする。

「そんなこと、知らない、ほんとに知らないわ！」

「あなたはほんの少し勤勉過ぎたってわけね、ほんの少しでも勤勉すぎると、ひどいことになりますよ。なにしろ頻発地震だから、誰かを支えにしたくなるのね、独り者の男は誰でもいいから女房にしたくなり、母のない子は誰でもいいから母親にしたくなる。気味の悪いことは知らん顔で見過ごしてあげなさい！」

「ああ、想いでしたわ。夜が更けるといいうのに捨て子みたいな幼児が十人も……いま、メシを食って、銭湯にいったって、プロレスをみて、美容院にいったって、ああ、洗濯もしなければ。もうちよつと迎えにいけませんの、もうちよつと。預かってくださるのが商売なんですよ。坊やにそういつてください、すぐ迎えに行くわ、いい子、いい子、さわぐんじやないって。親たちは横着者、それに自惚れ屋、あのころ、どうして仕返しをしようかと悪い考えが、雑草のようにわたしの頭にはびこっていたものです。あの誰かなのね。この男……」

誰かに掴まれている女の服のボタンが一個下におち、運転手の足の間にいる女の子が素早く飛び出して獲物のように拾い、再び運転手の脚の間に戻る。彼はそれを女に返せといい、女の子は

ジリジリ前進してきて、女に差し出す、女は奪い取って、きなくさい煙が脇の下から吹きだすほどの力で遠くに投げ飛ばす。

「三年前ですって？　こんな方のこと、わたしも、母も、全然知らない！」

運転手は馬がするように、裸足になった子供を脚の間で遊ばせつづけ、しまりのない、あてどない表情をしている。汚れたソックスの中年女が、妙なわけ知り顔になる。

「あなたは病気で崩れてしまう寸前ね、栄養の届かない指のつめの縦のすじをかくせないでしょう。売れ残るわよ、チャンスかもしれないじゃありませんか」

「病気はよくなったんです、ぶらぶらしてるのは、仕事なんかくそくらえ、それだけのことなの。だって、木曜の午後、きつと社長と課長と、そして五人の取り巻き、彼女と彼女、紅二点よ、時間内にゴルフに出かけるのよ。その仲間でなければ、何十年勤めたところで、一生出世なんてできないんだから。わたしがぶらぶらしてるのは、つまりそれなんです！」

「ここじゃ、話せないの当然ですよ。いくら地震でみんな共通のドキドキで生きているといっても、これはプロポーズですもの、大勢の面前ですものじゃないわ、車に乗ったらいかが……」

「まじめなんですか？　そうじゃなくて、この人、どさくさまぎれに汚い嘘つきになって、おなかに、毒ガスをため込んでいるのよ。たぶん、遊びで自分に言ってみただけなのね」

女は運転手と回りにいる人たちをにらみつけるが、みんな同じ強さで女をにらみつけているから当惑するしかない。この男は昔にほぼ恨みを持っていて、現在よりもずっと過去に欲求をも

ち、いま、破壊を機会に……わたしを、この男の作り変えた過去に登場させようとしているのだ。女は灰色がかった力つきた顔になり、それでも肩のあたりで怒るが、みんなは、さっき女の投げたボタンの落下地点と思われるあたりに一斉に注意を集中する。道路の中央部がふくれ、アスファルトが黒く光った粒をあらわにし、折れ曲がり、その上に碎石が吹き出し、更にその奥から砂が盛り上がる。まるでスローモーションカメラのようにゆっくりなのに、誰一人駆け寄りも、逃げもしない。手放して見ているばかり、砂のつぎに水が吹き上がる。

水道管が破裂した水柱のなかで細かい砂が上下動し、大分遠いところにぼうつと立った色のさえない虹。女が水を逃げ、走り出すと、誰かが投げつけでもしたように水のつぶてが後ろからぶつかってくる。後ろには、地底で一度も光も色も見なかったことのない生物が、いま突然地上に出てきて、紫外線におかされ、変わり者になりつつあるというような奇怪な様子で、人々が、水しぶきの乳色に縁取りされている。

女は逃げる、女が振り向くと体の粉が、そそそ、と流れ、一粒一粒の粉の裏側に大きな砂漠が広がり、誰もかも立ち往生して、砂漠を行く群のまま陥没する。

水没した道路で、女は車のつくる大波よりも大きい波をたて、いますばらしい勢いで生まれつづけ、騒ぎ回っているプラנקトンに追いかけられ、足を食い荒らされている。無感覚でありながら、女は万の体を失い、もうすぐ自分の体を選択し、他と区別することが不能になる。

何かが女の服を猛烈に引っかいている。小人がモモンガーのように飛ぶ。女の首に両手でしがみついてぶらさがる。

「ママ、ママ！」

女はあんまりびったり抱きつかれて、その子の顔を見ることができない。

「違うのよ、違うってば！」

首をしめるその子の指を一本ずつ剥ぎ取ろうとするが、指は主張して女全部を奪い取りそう。小さい手は女の首と接着してしまい、自分との境界さえ消して同体になりかねない。下に落ちる影はすでに一塊に縮んでいる。重い！息が出来ない。

「間違いだったら、わたしはママじゃない、よそのお嬢さんなのよ」

女はそばにいる人に援けを求めたいが、絶体絶命を辛抱して人を選び好みしている。その建物のシャッターがぐんにやり曲がり、骨を現している前、ジーパンをこぶの多い膝まで捲り上げ、二メートル近い高さの、眉骨の高い顔が笑っている。背丈の高い女のボンボソ声は発声場所がずっと高く遠すぎ、よく聞き取れない。

女は汗でぬらぬらしてきた子供を力一杯振り落とそうとするが、足を宙にばたばたさせた末、

子供は泥のついた靴を女の腕に巻きつけてしまう。

「ママじゃない、違うのよ！」

女は巻きつかれたまま卒倒しそうだ。さっきまで、さらさら粉になっていたのに、なぜ、たった一つの体に凝集してしまったの。変身は望めなくとも、粉になりつづけることを目指すが、女は瘦せた肩を怒らせようにも肩は子供に奪われてない。

「わたしは、あなたを知っていますよ。あなたは保育園にいらしたころ、雌鳥がヒナを翼の下に集めるようにして、子供たちと遊んでいらしたわ。あなたはこの子を自分の子じゃないといっていらしたけど、みんな知っていましたよ、この子がそう言っていましたもの。あなたはこの子の世話を特別よくみて、ひっきりなしに声をかけ、トイレまで連れて行き、あるときは、この子のホッペにあなたのキスマークがべっとりついていたんですって、あなたはこの園児は少し発育が遅れていて幼いから特別手数がかるんです、自分の子供なんかじゃない、わたしはこんなに若いんですもの、でも若いことと子供のいるかいないかは別ものね。そう言っていらしたわ、クイズみたいに。この子は父親のお母さま、つまりお祖母様と住んでいたけれど、お祖母様が亡くなられたのよ。地震の救援物資をもらいに行った時のことです、変なものをくれるのね、セロテープ一個ももらっただけなんですけど、倒れてしまい、それっきりでしたの。この子はひとりぼっちなのよ。世の中は、なにしろ、無茶苦茶に揺れつづけることになったのですから、ほんとのことは、ほんとのこと、こんなことでウソについてもはじまらない。この揺れじゃ、よほど悪辣なウソで

ないと壊れるわ。この子がこうやって飛びついて、ママ、ママと言っているのに、それをウソだなんて誰が否定できます？」

よく作られた話の骨組み。背の高い女は子供の顔をのぞいている、子供は手足でしっかり女にしがみついているながら、女にだけ見せない顔をそちらに見せているらしい、鼻息が女の耳の下あたりに吹きかかってくる。

「こんな子ほんとに知らないったら、ひどい子ね！」

女はもどかしいことに、かびに包まれたおぼろな記憶を、蜃気楼のように遠く逆立ちさせるだけ。背の高い女の声が落ちてくる。

「ママにまちがいないね？」

子供は声帯を壊したようなむせた咳をする。

「この子孤児なの？ でも孤児など、ものものしいものじゃない、どこにもいるのよ。世界中に今日孤児になった子が何万人もいるわ。この子一人だけがわたしの前にいるとしても……。いちいち泣いてあげられないわ。ああ、もう立ってはいられない、誰か来て、水が出るならバケツ一杯この子にぶっかけて頂戴！」

子供など気力のない肉の包み、女は狙いを定めて子供の尻をグイッとつねる。子供は女の首をまだ厚味のない爪でがりがりかく、女はその手首をつかむ、子供は首筋に噛み付く。

「助けて！ ママ！」

女は自分の母を呼びながらつぶれてしまう。頭を確かに床に打ち付けたのに、子供は泣きもせず、手を放しもしない、かえって女は子供の噛んだ首から血を流して泣き出してしまう。

女はここに居もしない母親に助けを求めつけ、

「ママ、ママ、ママ」

女は叫び、子供の顔の青味がかつたまだらと、血液のついた唇をはじめてみる。子供は、「フーン、フーン」

唇で息をはじめ、シヨールと吸い込み、歯が女の血で黄色い。女の汗がスカスカ気化熱をとって消え始めると、子供は眠たそうに歯の間から密度の高い息を吹雪のように吹きだす。

父親しかいない単性生殖、おそらくこの子の体の細胞は全部染色体が半数しかないに違いない。だから異常に強引に母親を求めつづけるのだ。メシベなし、花粉だけで生命をもった怪しげな実験動物。子供は棺の中で再び鼓動しはじめ、黒いコチコチのしかめっ面をする。

このしかめっ面、振り払っても、振り払っても、しようりもなく女の体をノックしてきた園児たち。女は、スカートを腰のあたりまで、めぐりあげられ、開いた傘になり、地面すれすれを引きずられ、ぶらさがられ、めちやくちやに足蹴にされて、ストッキングが一時間と持たなかった女の記憶のなか、首に噛みついて来る不敵なおびえ顔が一つ。記憶などとくに放り出した筈なのに、いままた、現実になって女に襲いかかり、どんな力もなく、されるまま蹂躪されている。

こんな子供、1°Cの気温の上下で凍結し、沸騰し、死んでしまう厄介な生きもの、特製の温室

のなかで育てられて、淡いピンクの光を浴びている単性生物、温室のガラス越し、誰かにしがみつ়くことで骨がらみの恨みを発散すべきなのに……。それが、逃げ場のない地震の震動よりも恐るべき悪鬼になって、どちらへ身をふりしぼっても、女の逃れるどんな位置をも不能にしてしまう。過去から手を伸ばそうと、現在から手を伸ばそうと、引き離しようのない、手の引っかかりようも剥ぎ取りようもない、重く隙間なく食い込んで合体しようとするべっとりしたもの、個体としてはとらえどころなく境界をもたないもの。女は体中を粉にして振り撒き、いたるところに拡がらなければ、もはや休息を知ることが出来ない。それさえ子供にべっとり蔽われ、粉のふきでるほころびは押さえられている。粉になったところで、執念深く混じり合って手放しそうな絶望。

なにごとが起こっているのか、女にはよくわからなくなっている。均質な怒りと恐怖の隙間を、女は後ろから一撃をうける。その衝撃のためか、てこでも動かなかった子供がバネの切れた人形のように転がりおちる。もうずっと前に死んでいたかのように顔中紫色。女はツバをのみ吹き返したばかりの息をはじめめる。溜息をするなど、いつもは偽りのものだったのに、本ものの溜息を肩でつき女を一撃してくれた者の方へ、その子を避けて後退りする。

「厭きたのでしょうか、こんな遊びに疲れたのね」

女の後ろにいるのは子供たちばかりだ、子供たちは昔保育園でみた彼らに違いない。黒いコチコチのしかめっ面。

「孤児だというから、何かしてあげたかったのよ、ママなんて言わなければ……。何かしてあげるつもりなら、わたし、何もしないよりはましなことをしてあげる自信があったのに……」

女のもうずっと見開きっぱなしの目の、疲れた色の上を数回灰色の網目が通り過ぎる。ヘアピンが女の毛先に危くぶら下がって踊る。

「どういう神経？　ぐずぐずしてはいられない、死んでしまいわ、人工呼吸をしてあげたらどうなの、あなたが振り落としたんですもの」

女は背の高い女の言葉にうながされてそうすることに抵抗するが、いくぶん体が泳ぐと、ちよつと両手をゆさぶり、一回だけ、身をかがめ、子供の胸を押してはなす。スーシューと空気が気管を往来した音、もう一度……。

まわりを囲んだ子供たちは女をにらんで、口も鼻もなく目をつぶし、ふだんの醜さを数倍にするから、女も、同じ醜さを数倍にする。

「ママなんだよ、ママ、ママ！」

子供たちは女の後退りを妨害して女の服をつかむ。女は駆け出すが、うようようごめく足の群になって、彼女の後ろや横についてきて、三十もの手に服がつかまれ、両方の手の指一本一本に一人ずつ、髪のひとつかみに一人ずつ、二、三十人もの子供たちが三年前と同じに、しかし、女に向かって浴びせかけ得る最も効果的な罵り、

「ママ、ママ……」

とわめきながら、追い駆け、引つ張り、引きずる。女は半ば服をはぎとられ、足を踏ん張り、粉を泳がせ、引きずられ空中飛行して、背からも手からも、意外に深いクサビ形の根をもった皮膚がもぎとられつづける。子供たちは、それでもなお、女の体のどこかにほころびを見つけ、追い駆ける野犬の群よりも残酷に食いついてくる。みんな粘つく足音をたてて、蒸気の混じった息をばげしく吐き出している。

突然、羽毛でも撒き散らしたような軽やかなゴミ屑が、女から吹き出しはじめ、やわらかな音をたてながら光をキラキラ反射させる。体の中を明るさと同量の暗さが吹き抜け、女は中心を失い、周囲ばかり、内側は骨一つ思い一つ残さずに消え果てる。彼らの一群は、蚊のひとかたまりのように煙って塊まり、風に流され移動していき、生あたたかい街並みはふつつり切れる。

ほんとうは、女に言葉をかけることも、ちょっと目をおくことさえ、意地悪に違いない。男は女をちらちら見つめ、女は柱にそって糸をぶら下げている。上で押さえつけている糸は、一メートル下で二センチは開く。傾きを測って顔を逆さにする女の皮膚は、まだらに粉が吹き出し、輪郭がおぼろで、声がなければ違う誰かだ。女の話し声まで遠いこだまを引き寄せる。

「床がふにやふにやになってしまったわ、長い間ハイヒールを履いて歩いたあと、ハダシで歩く廊下みたい、足の裏がつま先上がりの曲面になって感じるもの……」

「そう、張り替えるのかもしれないけど、きみ家のひとに怒られないの、地震のせいや古いばかりでなくって、きみの靴のかかとで、床がぼこぼこになったんだからさ！ それに、張替えのきかないものもあることだし……」

男の頭のなか、腕にも背にも首にも、総ての筋肉にどうしていいかわからない、やりきれなさが生まれ、そのやりきれなさを解消するために女を描き始める。

本の六十五ページの左上の隅と、それから暗黒王の配下の図解で白地の多い八十ページ、男はボールペンで、女がどんなに変わったか似顔絵で示そうとしている。女はそれに気づかず話をつづける。

「あなたのところでは、地震のあとでも水が出るの？ うちの水道は風を吹きだして水道の蛇口の、あのひやっこい冷たさがないのよ、お湯が出るのでもないのに。のぞきこむと、細い洞孔は暗いのに、敵がいると気づくと水鉄砲を打ち出す魚のように、一直線に水を吹きだすの。それがねだるような甘ったれた声を出して、少し間をおいて二発目を撃ち出し、ヒューッと甲高い悲鳴の笛を吹くのよ。わたしが野球のバットで強打しても二、三滴ぼとぼと落ちるだけ……」

男のペンは六十五ページに髪の毛の形だけ描いてしくじったあと、八十ページに移り、目眉だけ描き、思わしくなく閉じ、内裏表紙に、まず女の唇を、縦に刻まれている唇紋まで丁寧に描きとり、

目鼻も輪郭も描かないうちに、はげてまだらな顔の斑点を、必要以上に細かく小刻みに線を入れて描き、男はひそかに悲嘆か満足かをする。だが、女がひよいとすまし顔で口を結んだりすると、全く別のところにもっと違うまだらが生まれ、それが女の老化の源であるのか、サソリ形に這い、毒のある針を女に向けて刺している、毒は深みにひろがり表面までにじむが、その周りにも色を変えた部分ができるから、男は絵にそれを新しく付け加える。男は描き始める前のやりきれなさがときほぐされ、やわらかく穏やかな筋肉に支えられている。

「夏のあいだ、あなたと毎日プールに行って大滝滑りをしたわね、百五十メートルコースを滑っている女の子はわたしひとりだったから、十七歳だろうなんて言われたの。六つも若く見られたのに、この間は知らない子供たちにママ、ママって言われて怖かったわ。食い千切られてしまったのよ、この世の終わりって、あんなことばかり起こるんでしょね、憤りは噛み殺さなければならぬのかもしれないけど……。そんな齢に見えるようになったのかしら。でも大滝滑りのときだって、本当は途中で加速度のつかないように手でブレーキをかけながら滑ったから、大して勇ましくはなかったのよ。ずいぶん早くから両足をびんとあげ、手をぱっと広げて着水態勢をしていたから、格好だけはよかったんでしょ。飛んだ距離はほんの三、四メートルで、それも水の中で転び、監視員に、ピーッピーッと笛を吹かれて恥ずかしい思いをしたわ」

女は男が自分を描いていることに気づき、男に愛撫でもされたように、大人しくなり、男の両眼と一つに溶け合うのを待つが、男は女の目の下のほころびにクシヤクシヤに詰め込まれたシワ

を見ている。眉間のとげのある昆虫の脚形に男の手が冷たく触れ、男が見つめながら後退すると、女は頭をぐらりとさせる。それは余りにも早々に来た老いで倒れかかるようだ。男は真剣にポールペンを動かし、キメの荒さ、薄っすらとした鼻ヒゲの一本一本まで、細部残らず描きこみ、顔の輪郭を描き、最後に髪を載せる。髪が白紙のほかは、もうどこ一つ訂正のいらぬ女の顔だ。女は男から本を受け取って絵を見る、口をあける。女の肖像、気づかわしげな目をし、迫力あるシワをもち、蛇皮よりもうろこのささくれた斑紋をもつが、それでも人間の顔だ。女の歯並びが一ぺんに崩れてしまう。

「あなたはわたしを嫌っているの？　こんな残酷ができるなんて、わたしは嫌われているのね。口で言わない卑怯者！　腕が悪いからそうなった、そうとも言えないバカ正直！　わたしがこんな顔だとしたら、今すぐ死ぬわ。あなたにわたしがこんなに見えるなら、あなたを殺すわ！　本当のことを言ってお願ひ、本当のことを言ってお願ひ。わたしはいま、綺麗さっぱり消えてしまうから。じっと見ていて欲しいの、ほら、いま、綺麗さっぱりいなくなっただけ見せる！」

男は本の内裏表紙をたんねんに眺めるふりをしてから、曲がった細い短い線を一本付け加えて、女に手渡す。女はさっと本で顔を蔽いなにも言わない。

しばらくして本を手放して床に落とすと、女の顔から血がしたりおち、一面に掻き毟られている。血のにじんだ体の粉が右手の爪の全部に半円形になってめりこんで、ドレスの腰のあたりで、しきりに拭い取られている。

女は押し潰されたように座りこんでしまう。顔がやわらかく重く、甘酸っぱい臭いをただよわせはじめる。

「はやく顔を剥ぎ取ってちょうだい。皮膚があるならむきとるの。ないのなら、わたしを白い粉だと言って。汚いのね、腐敗しているんだわ、いま目のすぐ下から腐臭のガスがぼこぼこのぼつたもの。わたしの鼻をつまんで、早く鼻をつまんで！ あ、わたしの口を押さえて！ ううん、ひっかいて！ ひっかいて！ 腐るってかゆいのね、あなたの爪を突き刺して！」

女はほこりにまみれた一片の肉だ。土がびくびく動き出すから、その上の家も動き、床も動き、腹這いになった肉片は飛び上がり、裏返しになり、這っている男も飛び上がる。男は床を膝で這いまわり、肉片をハンカチで拭う、いたわって、こすらずに、軽くたたく。肉片から附着してくるもの全部を拭いとるまで。女は目を閉じて男を見ないし、自分も見ない。胸の粉が拭き取られ、薄いかさぶたが点々と現れ、それもはぎとられると紫色のなめらかな皮膚、治療すること、悪化すること、どちらにも自在に変化できる細胞膜のような薄い薄い皮膚だ。

顔の下の、女のもうひとつの顔のなかの目のかたちに、まだらが小さい乳房を包んでいる。男は顔をそむける。

「しょうがないな……」

「しょうがないって、どういうこと？」

女は自分の手でむしる、雲母がはげるような微かな輝き、亀裂した皮膚の割れ目は幾重かの皮

膚をまだ用意している。天井がギイギイ音をたてる。

「大地震だわ、早くしないと逃げられない、逃げなくてすむのね、あなたが拭きとって、もう粉だけのわたしはいなくなつたのね、あなたはわたしを消したのよ。理由は見るに耐えないから！」

男は上を見上げ、つぶれて頭のないボロ屑になる。女の白血球が血管壁にもぐりこみ、赤血球が球にならない核のまま骨髓につき返される。女は肉片だ、皮膚がないため残忍にかじられてしまふ。男は肉片の怪物に引き裂かれるのを逃げ、大地震の閃光がきらめき、夕暮れに巣から出たばかりのコウモリが、もう地面すれすれでUターンする。木の穴に帰ろうと、入るのを試みて、穴の入り口あたりにバタリバタリぶつかっては危く円を描く。

女は二、三分手放して眠りこけ、体がやわらかくなつてどちらにも片付きそうになり、無感覚な数分をすごし、体の外をざあざあ流れていく砂の流れに会う。

ずっと前に放り出してしまつたドレスがあり、口紅があり、まつ毛があり、記憶がある。ゆがんでいた老朽家屋がもっとゆがみ、投げ上げたものが落ちてくるのさえ恐ろしい偶然だったりする、水平感覚の欠如。女と無関係に並んでいるそれらの物が、女に寄りそうことなど一度もなかったのに、いま砂の流れに乗ってきて、親しそうに同じ向きに横たわる。ウインク一つで物を自在にあやつり動かす経験さえする。

十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、十、……○のない秒読みばかりがいつまでも続いて、女はまだ、そこから消えてはいない。甘い煙はもう立たないが、ありつただけの凄まじい打撃、

いまにも裂けそうなほど緊張した鼓膜がぱつとひらき、女は無意識にさっきの記憶に伝わっている。廊下の曲がり角の四角い木が落ちて、壁の隅から三角のかけらがぶら下がり、下は崩れる砂、この家には男もその母親も誰一人見えず、照明だけがついており、外から薄闇がさしこんでくる。

いつかの声の記憶、黄色い怪獣、子供がどこかですすりあげる。どの輪郭も震動でぶれている、粉々にくだけた黄燐の匂い、子供の耳が真横に張り出しているキノコの影、逃げていく方向はいくらでも開いているのに、女はたくさんの思い出すべきことにとらわれ膝を白くする。静かにこみあげてくるものがあって女の体がぐんなりし、ほてってくる。

記憶の一番奥に追い払われながら染み付いていたその子の顔が、逆さの奇妙な姿で見上げている。片目が青く安っぽい光を発する義眼だ。

「先生が後ろから、ドンと押したからさ。ぼくも少しは押したけど、ほんのちよつとだもん」
「おれも……」

「あたしも、みんな押したけど、あたしたち、ちっちゃいんだもん」

「先生が怒ってさ、そいで酔っぱらって、がまん出来ないわあ、って先生が押したんだもん」
打った目に障害の雲ができ、三年も過ぎてても、不死身にわなないている小人。

「覚えているのね、わたしじゃないよ、お酒など呑んだことがなかったし、みんな一時に、追い払いたかったのよ。悪い子がいるから、優しくばかりしてはいられなかったわ」
ひとつの可能性が疑惑のように入り込んでくる。

その子は首を振り、すすり上げてしゃがみこみ、上から死が落ちてくるのを待っている。あのとき目が暗くなったと同じように、突然、そうなるのを……。

たったひとこと残す最後の言葉としてだって言える。

「わたしじゃないわ！」

女を取り巻いていた震動さえ絶えた白々しい沈黙。地震で、土も、家も、人も、夜も、昼も、すっかり混じり合い、ここは川べりであっても、女の家であっても、海底の廃船のなかであつてもかまわない。あらゆる場所でもあり得るのに、女は逃れ出すことが出来ない。その子を背負つて、狭いゆがんだ家にとどまり、電光を浴び、外の薄闇からガラス越しに、三年前の保育園児の群れ、闇より黒い圧力をもつた視線の突進にぶつかり、ひとたまりもなく、女は顔を床に打ち付けられる。

岩風呂の中はぬるぬるしていて、足がすべって、どうにも底に体が固定しない、転びそうになつて、女はゆるりと岩につかまり、岩にとまった人魚のように、岩の間から、ずっと遠い平野の上の海まで見通している。

海面で上下している白い船にまじって、赤い船が港に向かってゆっくりと動いていく。

硫黄の匂いが毒ガスめき、足を湯につけると、空と平野の境界、平野と海の境界、海と空の境界の全部が白い隙間をつくって剥離する。

岩風呂の底に割れ目があり、女は陥ちこんで足をとられ、抜けなくなる。

「ああ、かかとして、どうしてこんなに、ごっつい骨の塊なの？ 湯で氷が溶けるように、足が溶けてなくならないものかしら……」

女は動き、あたたかい湯のなかで、真冬の朝のように自分の息が影をつくるのを見ている。岩風呂の西と東は、それぞれ、日の出と、日没で、岩風呂がその中間の夜、女の周りを硫黄が流れ、いつか地震で、岩の底が割れて湧き出す湯を予感し、自分で足をひき抜くことをやめ、それを待つ。ゆるやかな休息だけが望みなのだ、足など動くときしか役立たない。

あまり真上を見すぎて、あごが水平になってしまう女の顔、上気して虫歯で膨れたような、光ったふくらみの頬をもつ。女は足を岩の隙のなかでゆっくり回す。地底の震源から岩礁で連なった湯が滲み出ている岩風呂にありながら、天井の岩盤は女のあごを上げた顔に相對して、地底よりもはるかに硬く力強い。

少女は半ば岩に埋められた形で、動けるのは上半身にすぎないというような大人びた身動きをし、ときどき上に上がって、一人分の岩の窪みを選び、西の川を眺めては、女を振り返る。女から出る粉は湯に溶け更に痩せ細る。少女から見れば再生しそうな大人だ。

「一人できたの？」

「そうよ、そのうち動かなくなつて死んじゃうんだつて。不思議なことね、そう、お医者さまがいったの？」

「膝に耳を当てたの、そしたら、それが、あたしに聞こえたのよ」

「なにが？」

「何がって聞くの、そんなこと答えられない。きのう、きょう、きのうきょう、きのうきょう、あした……」

少女の早口はとまらなくなる。西と東から入ってくる光が、にわかになつて、フィルターを取り替へつづけ、つぎに赤い光が移動し、女はくすぐられたように湧いてくる倦怠に支配される。手を湯から出して再び湯の中に戻すと、小さい渦巻きがくると回つて消える。

いま地震中で岩という岩で水が飛び散っているのに、女は何度も繰り返して、幾つもの渦巻きが一度に数個浮きつづけるようにする。また後ろと前で日食のようにたそがれと夜明けが入れ替わり、女は足を同じ割れ目に突っ込んだままにしておくのがつらくなる。

足の先から爆発する！

「足が見えないわ。こんなに窒息をして、頭のつむじまで湯につけて、すかしてみても片足は行方不明、どこにもない。そのくせ見えない岩の割れ目の足だけがふん張るのよ、足の先から一筋の赤い神経が長くどこまでも走っていくわ。ああ、どっちに向かつて走っていくのかわからない。

もう細くなって遠くなって、それでもピリツとくるの。なんか知らないけどピリツとくるのよ。すつくと立ちたいのに、長い長い遠い一筋の神経が、幾千万もの波を打ち、ガガガと彫りとられる。伸びていく先に、なにが待ち伏せしているのかしら？」

いま揺れて、なにかも自由に見えて、山のいただきも、海の底も大陸になる。

海の底は廃船のクサリがブランコし、決して飛躍しない下へだけ窪んでいく沈み方から浮上する。空が、陸と海をつまみあげ、空に魚をぶっつける。高さも測れない大津波がくる。ゆっくり見えても、車を追い駆け追い抜く瀑布の大移動だ。ずっと下に、街路樹につながれた車が、街路樹もろともタイヤを見せてぐらり呑み込まれ、つぎつぎ没してしまう。

陸地はギクシャクし、銀色の石油タンクが、倍にふくらみ半分に収縮し、それを二三回繰返すとまるで、空も陸もそのために高く広かったというような大爆発をする。まだまだ爆発的燃焼が終わりなくつづく大きなキノコ雲がみえる。

あごに、耳に、腰に、額に、湯がぶつかって、女の体の内部に焔が湧き出し、胆道の管の中に、にがい臭気がばんばん充ちて、ぶんぶんふるえ、タマゴ色の滑らかな石が堰止めをする。女の母の病気が、こんなところで女を襲う。

わたしはママをいたわってあげるのを忘れていたわ。

「大切に上げてあげるね！」

胸の石が吹き飛んで焔が流れ落ち、岩の割れ目の足はがくがく岩にぶつかり、岩の割れ目を拡大

し、地の底へ底へ突進して稲妻より早く突つ走る大亀裂になる。足から伸びる一筋の神経に沿つたその方向に。

川に飛び込んでくる子供たちの服は炎をあげ、水は油ぎった光を浮かべ、どの子ひとりも水輪の中心におかないほど、くしゃくしゃに壊れつづける。水をくぐって服を捨て、まるはだかになった子供たちは、岩をよじのぼり、次々、岩風呂に飛び込んでくる。どの岩もみんな口を開き、霧化し、見えるのは子供たちばかりだ、みんなさかさまに落ちてくる。彼らは油煙できっちり閉ざされた肌をゆるませ、岩風呂のなかをぐるぐる回り、たがいに離れ、再び寄り集まり、その動きに、

「ママ、ママ！」

女を巻き込み、次第に数を増し、一つの塊になる。油が分光する。

赤い子供の手が黄色の子供の肩甲骨を下からつかみ、赤い子供の両足を灰色の子供が横から手でつかみ、目と足の裏だけ白い緑色の子供が横になってその子の足の裏をあごの下に押し当てる。青とオレンジの二人はそれぞれ手足がからまってしまい、不思議な位置からすっきりつけ間違えたように手足をつきだしている。

女はその手足や胴のなかに複雑に編みこまれ、子供たちが回るたびに水底を手で押さえるのに懸命になっている。人間が組みあい構築するアクロバットだ。空中と違い、水中で、しかも下はぬるぬるした硫黄の岩風呂であつてみれば、やすやすと、いささかの危さもなく組み立てられる。

もつれた海藻のはびこった海の底に似ている。女は息をとり直すことを思いつき、水面を探し求めるが、水面はどこにもなく、どうあせっても、落ち着いても、体を引き上げる方向さえわからない。

「みんな離れて！」

息がつまる、溺れる、こんどばかりは死んでしまう、腕や足が透けてくる。昆虫みたいにぬける。お湯が口からどつと流れ込んで体が沈む。割れ目におちて地の底まで沈んでしまう、鼻をひっぱりあげるのよ、そういえば手のありかがわからない、足も……得体の知れないコブみたいなものを踵かと思つてつかまえるが、誰のものかこんがらがって……といつても胴はどこにもなく頭さえなく。

体の粉はみんな湯のなかに流れ出してなくなっている、逃れてしまったんだわ。まったく、あきたたことに助かっている。わたしは何処にもいなくて、何処にも漂っている。

みんな、いま湧いた透明なイワシの子のように体を寄せ合つて群れ、巨大な鞠だ。わたしを探して中へ中へ縮む丸い群れ、わたしはもう途方もなく大きく広がって空になり、魚をつまみあげることも、極地に放り出すことも可能なのだ。

煙や炎の尾を引いて人々が飛び込む川は、燃える石油も流れ込み素早く炎が走る。どこもここもオレンジ色に燃え岩風呂まで燃え上がり、女の足先から割れていったあの岩の亀裂が、地の底の白い空洞に達するころ、亀裂に炎の流れがとうとうと陥ちこむ。ここからだけでなく、きつと

世界中の亀裂という亀裂に、オレンジ色に燃える炎が走り、地の底の空洞に向かう。重く鼓動し、凶暴に打ち破り、轟き、唸りを上げて地の中心でぶつかり合うとき、一瞬凍ったように透きとおりに、いま開く赤い花びらになって拡がり、内から外へ、そよぎながら重なりを増し、千切れそうにはためき、無数の粉になった女はその縁で無数の口をあけて煙を噴き出す。煙はゆれる蕊からの更に細かいおびただしい粉、赤や黄色やオレンジ色のフィルターになる。その中心から溶岩が噴出する。どろどろとした黄緑色の流れの回転、地底の空洞のすみずみまで、赤い斑点を押し、充ちて、何者かわからない、突っ走る影が生まれる。地上に向かって八方に昇っていく影、ぶつ切れの振動、その連鎖が見える。

男の二本の釣り糸は、右側に流れている。川の底の方で流れがあるのかもしれない。ウキは全く動かず、男は釣竿をあげる。餌に食いつくのは泥ばかりだ。釣り針は男に引っかかり、取り除くのに骨を折る。まわりから放射する沈黙のなかで、男はいま釣られて針を抜かれ、ノドが傷ついて棄てられた状態から、急に甦り、生きているものとの接触をとり戻す。あたりは不意に陽だまりになり、意外に爽やかな蒸気がたちこめ、変声期みたいな声で鳥が鳴き、黒焦げのかやの堆

積のなか、ブロックの欠けらに油煙がただよう。対岸の断層にはいくつかの穴が並んでいる。男のなかに蒼空を押し広げるような恍惚感がくる。

男は釣り針に餌をつけ、思いきり遠くに投げる、赤と白のうきが立ち上がり、ずっしり重い竿をあげると、すそを水に没したまま手元に走ってくるのは、あちこち黒焦げの黄ばんだドレスだ。まだそれほど泥はにじんでいない、男は再び釣り針を垂れる。水のなかに生き物らしい影が見える。手足を出すことを忘れ長寿を保っている巨大なオタマジャクシのたぐいか？

ひっかかる、こんどは黒ずんだ子供の服、小気味よく水滴をばらまき、対岸の景色のうつる水面をこわしてしまう。靴、赤いスカート、セーター、半分以上焼け落ちていゝズボン……みんな水を吸って重いが、沈んでからそう日時がたつていゝとも思えない。男の釣り糸が切れてしまい、太い糸にかえ意地になって釣り上げる、シオルダーバックだ、口金がゆがんでいる濡れたサイフから男は紙幣をぬきとり、身分証明の写真をはがしてポケットに突っ込む。釣り竿をケースに納めると、男は清掃夫のようにかいがいしく釣り上げたものをつかんで、次々川の中に投げ込む。投げ込まれた布類は、水に洗われ、焦げたボロの細片をゆっくりと、くらげのように浮遊させる。

陽性な女の水死体があおむけに水をくぐっていく。地震のあとでは、数知れない溺死体が川底で光っているのだ。

地震がくる。遠く海が見え、水平線が身震いしている、雲は風に追いまくられて走っていく。

男は川のなかに落ち込むと見えながら、次の揺れで岸の上にいる、対岸の断層の中層あたり、七色の泥の流れが見える。流れは、狭い河原に息詰まるような異臭を吹き出して、泥の丘を広げていく。女の消えた穴はもうなく、人間に変装させられない地底の時間、男は驚きを、いくつも、いくつも、つぎつぎ、まだ吹き出さないまま、体のなかに溶かしてしまう、そんな驚き方をし続けている。

完